

表現の場として！ 腕だめしとして！

自治体文学賞を狙う

どんな賞でも、受賞すれば弾みがつく。

自分では傑作だと思うけれど、客観的にはどうなのか。

そんな不安がなくなり、今までやってきたことは間違っていなかったと自信になる。

誰もが注目するメジャーな賞もいいけど、そこでつまずいてばかりなら、

自治体文学賞に目を向けてみてはいかが？

ハードルは低くはないけど、創作活動を結実させる場として、腕だめしとして。

アマチュア作家に門戸を開いている文学賞に向けて、いざ！



イラスト もとき理川



自治体文学賞

誕生と現在

自治体文学賞の起源

自治体文学賞のさきがけとなったのは、1988年(昭和63年)から募集が開始され、翌1989年(平成元年)に応募が締め切られた「坊っちゃん文学賞」と「自由都市文学賞」。いずれも市制100周年を記念した文化事業だった。

当時は市制100周年と釘打った公募が多かったが、それには理由がある。平成の大合併という言葉は記憶に新しいが、その前に昭和の大合併、明治の大合併というものがあった。

1889年(明治22年)、市制町村制が施行され、市町村数が71,314から15,859に減少した。このときに39の市が誕生したが、明治22年から100年後にあたる平成元年、それらの自治体が一齐に市制100周年を迎え、多くの自治体が記念事業を行ったというわけである。松山市と堺市の記念事業もその中のひとつだった。

この成功に触発され、その後、自治体文学賞の創設ラッシュを迎える。当時は好景気(バブル景気)のうえ、1988年から1989年にかけてふるさと創生

資金として各市区町村に1億円が交付されたことも追い風となって、様々な公募イベントが生まれた。

出版社と組んで欠点をカバー

自治体文学賞の特徴は、1990年代当時で言えば高額賞金をうたっていることだった。これは自治体文学賞に限らない。新設された文学賞であれば歴史も権威もなく出身作家もいないから、高額賞金を掲げてPR効果を狙うのは当然のことだ。

一方、応募者から見て気になるのは、賞金は励みなるが、受賞後の道が見えないことだった。

新人作家の発掘と育成を目的とする新人文学賞と違い、懸賞小説の場合は受賞後のフォローまではないのが普通だが、それまでの懸賞小説は、新田次郎を生んだ「サンデー毎日創刊30年記念100万円懸賞小説」や、三浦綾子の『氷点』を世に出した朝日新聞社の「1000万円懸賞小説」のように、プロを生み出す力があつた。

しかし、自治体は出版社でも新聞社で

1989年～1994年に生まれた文学賞

賞タイトル	自治体名	賞金	創設	備考
自由都市文学賞	堺市	130万円	1989年	第22回で終了
坊っちゃん文学賞	松山市	200万円	1989年	隔年開催で継続中
舟橋聖一顕彰青年文学賞	彦根市	30万円(現在は50万円)	1989年	継続中
野上彌生子賞(感想文)	大分県	10万円	1989年	第15回で終了
いろは文学賞(童話)	志木市	100万円	1990年	第12回で終了
伊東静雄賞(現代詩)	諫早市	50万円	1990年	第22回で終了
マリン文学賞	鳥羽市	100万円	1990年	第10回で終了
内田百閒文学賞	岡山県	200万円(現在は100万円)	1990年	隔年開催で継続中
菊池寛ドラマ賞(脚本)	高松市	100万円	1990年	第7回で終了
自分史文学賞(自分史)	北九州市	200万円	1990年	継続中
現代詩中新田未来賞	中新田町(現加美町)	20万円	1991年	第12回で終了
1,000万円懸賞小説募集	具志川市(現うるま市)	1000万円	1991年	単発開催
振媛文学賞	丸岡町(現丸岡市)	50万円	1991年	第2回で終了
うず潮文学賞(随筆)	尾道市	30万円	1991年	単発開催
小諸 藤村文学賞(随筆)	小諸市	30万円	1992年	継続中
小倉南区賞	小倉南区	10万円	1992年	第5回で終了
奥の細道文学賞(紀行文)	草加市	100万円	1992年	隔年開催、第6回で終了
一筆啓上賞(手紙)	丸岡町(現丸岡市)	10万円	1993年	新・一筆啓上賞として継続
浦和スポーツ文学賞	浦和市(現さいたま市)	100万円	1994年	隔年開催、第4回で終了

もないから、原石を発掘する能力という面においても、また受賞作品を商業出版して話題を作るとい面においても、当初の自治体文学賞にはそこまでの力はないかった。

それゆえ最近の自治体文学賞は大手出版社と組んで開催するケースが多い。自治体としても選考と受賞作品の刊行という面で大きな力となつてもう、出版社側からしても有為な新人と作品を見出す機会となるわけだから、両者両得である。特に太宰治賞のように賞の運営は出版社予算面は自治体と分担するスタイルは、自治体文学賞の新しいかたちとして注目していいだろう。

最近の自治体文学賞

自治体文学賞に対する一般的な応募者のイメージを代弁すると、「異端の小説は好まれないのではないか」ということだと思ふ。実際はそうではないのかもしれないが、ひたすら気色悪い小説とか、性的問題に真つ向から挑んだ官能小説といったものにはお目にかかったことがないから、応募する側のせいなのか、それとも選ぶ側のせいなのかは分からないが、なんらかのバイアスがかかっていることは確かだろう。

ただ、ジャンルのには広がりを見せており、いい意味で自治体らしくない賞も

ある。「北区内田康夫ミステリー文学賞」や「島田荘司選ばらのまち福山ミステリー文学新人賞」のように、ジャンルを打ち出してエンターテインメント小説を募集している賞がそうだ。今のところ二賞だけだが、他の賞との差別化ということもあり、今後はこのような賞がもつと出てくるだろう。おらが町が生んだ小説」を読む市民としても、どうせなら楽しく読めるほうがいい。

賞名に地元ゆかりの作家名を入れた賞が多いのは、自治体文学賞創設ラッシュのときから続いている傾向だ。

その中には誰もが知っている文豪の名を冠した賞もあるが、そこまでは著名ではない作家であつても、それを顕彰することは地元的には意味がある。

たとえば、「長塚節文学賞」や「木山捷平短編小説賞」。

長塚節の『土』は、明治43年に朝日新聞に連載され、夏目漱石に絶賛された農民文学である。木山捷平は、昭和8年に太宰治らと『海豹』を創刊した同人で、短編の名手でもある。

二人とも知っている人は知っている有名な作家だが、活字離れが進んでいる今では地元の人ですら読んでいない可能性もある。その意味では、文学賞を創設することで、わが町にも偉大な先人がいたと郷土意識を喚起することは大いに意義がある。

応募するメリット

締切がなければ構想ばかりでなかなか書き出せないもの。だから、アマチュアの人に創作の場を設けるというのはそれだけで意義がある。

また、受賞すればなんらかのかたちで活字になるから、アマチュアにとつてはそれも大きな特典となる。

さらに言えば、受賞することで大きな自信となるというメリットもある。腕試しと言つては語弊があるが、自分が表現しようとしたことやその手法が、第三者的にはどうかを試す機会としては、自治体文学賞はいい。

自治体文学賞と自由

自治体主催ということに気にしすぎると、作品はどうしても小粒になり、受賞作を敬遠する人もいない代わりに、絶賛するもないような無難なものになりがちになる。

これは応募者にも言えるが、審査をする側にも言える。

20年前の自治体文学賞創設ラッシュのとき、予選を担当した方々が審査に慣れていたなかったのか、それとも過剰に自治体主催であることを意識してしまったのか、おとなしい作品ばかりが最終選考に

「ちよだ文学賞」の第1回受賞者、紫野貴季さんは、その3年後、第22回「日本ファンタジーノベル大賞」を受賞したが、「ちよだ文学賞」について「自分の路線が間違つていなかったと自信になった」とコメントしている(2010年10月27日の読売新聞紙面より)。

自治体文学賞を受賞し、その後、プロになった人は、例外なくそこで自信をつけている。これを弾みに別の賞に応募するのでもいいし、また、大手出版社と組んでいる自治体文学賞の場合は受賞をきっかけに編集者となることができることもあり、その際はプロとして持ち込みをしてもいい。これも大きなメリットだ。

残ってしまったことがあつたそう。

ただ、そうは言つても、実際に審査に加つてみたとしたら、「自治体主催の賞では、やたらに人が殺されたり、暴力だのセックスだのつてまずいんじゃないか。読んだ人が眉をしかめそう」と思つてしまうのは人情だろう。

しかし、純文学であれエンターテインメントであれ、人間を描こうとしたら避けて通れない表現もあり、制約ばかりでは文学は生まれえない。

税金を使つて主催する以上、仕方ないという意見もあるが、ならばいっそ自治体文学賞の歴史を塗り替えるエポックメイキングな作品の誕生を期待する。

自治体文学賞 受賞者座談会

——文学賞への応募は、自治体文学賞を受賞されたときで何回目でしたか？

柄澤 通算で6回目でした。太宰治賞に関しては、初めての応募で賞をいただきました。

安堂 何回目の応募かはつきりとは覚えていませんが、通算では30回近くだったと思います。

——その時点で、小説執筆歴は何年だったでしょうか？

柄澤 3年目でした。1年目は習作に専念し、2年目は「腕だめし」のつもりでいくつかの文学賞に矢継ぎ早に応募、3年目に半年をかけて太宰治賞への投稿作品を書き上げました。

安堂 10年ほどです。サラリーマン時代は仕事に追われて執筆などとてもできませんでしたが、「これでは何も書けないで終わってしまう」と考え、50歳の節目に書き始めました。

——小説を書き始めた当初は完結しないうちに挫折したこともあったと思いますが、完結した小説を初めて書き上げたのは何作目だったでしょうか？

柄澤 実質的には太宰治賞を受賞した作品が初めてです。前項で「いくつかの文学賞に応募」と言いましたが、後述するとおり、それまでの作品は習作の域を脱していなかったからです(それに気づくまで、10作ほど書き散らしました)。



撮影 / 山田なおこ

柄澤昌幸 (からさわ・まさゆき)
1969年、長野県生まれ。国立長野高等専門学校土木工学科卒業。2009年、「だむかん」で第25回太宰治賞受賞。

安堂 小説というだけで言えば、50から60作目くらいだと思いますが、正確には覚えておりません。エッセイを入れれば100は超えると思います。

——自治体の賞を受賞する以前には、どんな文学賞に応募していましたか？

柄澤 大手出版社の賞に100枚程度の作品を1回、自治体の賞に50枚程度の作品を4回応募し、すべて落選しています。「腕だめし」という、文学賞への侮辱以外なものでもない心構えで書いたのですから、落ちて当然です。今でも下読みの方に申しわけない気持ちです。

安堂 「オール読物」「小説現代」「小説推理」等の新人賞に応募していました。

——自治体の文学賞に応募した理由はなんですか？

柄澤 受賞作は当初、大手出版社の文学賞に応募する予定でしたが、執筆中、たまたま太宰治賞のムック本を手にしました。この本には受賞作以外にも最終選考に残った作品すべてが掲載されるのですが、それらを読んだとき、たとえ落選作であっても、行間に真摯な情熱を宿していることを知って、愕然となりました。書く上で一番大切なことを教えてくれた先輩たちと同じ軌跡を追いたくて……というのが、太宰治賞への応募理由です。

安堂 自治体の文学賞だから応募したのではありません。内田康夫先生を尊敬しており、先生の名を戴いた賞が欲しいと

文学賞受賞、その後

文学賞を受賞後、どのような足跡をたどってプロになるのかには、いろいろなパターンがある。

① 受賞後トントン拍子型

デビュー作がヒットし、その後も次々にヒット作を生み出すパターン。『太陽の季節』で文学界新人賞と芥川賞をW受賞後、文壇の寵児となった石原慎太郎や、村上龍、村上春樹などがこのグループに入る。100人受賞者がいてもそのうちの数人。

② 若くして受賞後に修業時代型

高校生でデビューした三田誠広(その後、早稲田大学に進学、社会人生活を経て芥川賞受賞)や綿矢りさ、金原ひとみがこのタイプ。在学中に受賞した場合、作品のストックも作家としての修業時代も少なく、受賞後がその期間になる。余談ながら、早稲田大学のある先生は、「生徒に芥川賞作家がいたらやりにくいんだよ」と。ごもつとも。

③ 受賞後しばらくしてブレイク型

とりたてて話題にはなっていないことを除けば、②と同じパターン。ほとんどの受賞者がこのタイプに分類される。特に短編の賞を受賞した場合、それだけでは本にならないから、商業誌レベルの作品をあと何作か書かないといけない。しかし、担当編集に出しても出してもポツの連続で、もういいかげん書くのをやめようと思った頃に突如転機が訪れる。



撮影 / 上原勇

安堂虎夫（あんどう・とらお）
1950年、鳥取県生まれ。京都大学文学部西洋史学科卒業。
2011年、「神隠し 異聞『王子路考』」で第9回北区内田康夫ミステリー文学賞受賞。

思ったからです。

——自治体の文学賞を受賞して良かったと思う点はどんなことでしょうか？

柄澤 太宰治賞の場合、受賞作が単行本として書籍化されることでしょう。また、よそ者にもかかわらず、主催の三鷹市の皆様から大歓迎を受けたのがうれしかったです。

安堂 特に自治体だから、と考えたことはありません。

——自治体の文学賞を受賞後、執筆や連載、取材の依頼はありましたか？

柄澤 貴誌のご依頼を除き、エッセイ4件、取材4件、ラジオ番組への出演が1件あったものの、肝心の小説の依頼はありません。これは太宰治賞の問題ではなく、ひとえに私の力量不足です。

安堂 残念ながら今のところ一度もあり

ません。

——自治体の文学賞に関して、何か望むことはありますか？

柄澤 新人の挑戦の場として、息長く継続してほしいです。

安堂 私のような者から、望む、ということはありません。

——大手出版社の文学賞と比べると、難度に差はあると思いますか？

柄澤 大手出版社の文学賞はプロを目指す方が投稿するので、応募作品の全体の質は差があると思います（太宰治賞の場合、年輩の太宰ファンがけっこう投稿すると聞いています）。ただ、受賞作に関しては、私の拙作は別として、大手出版社の文学賞と遜色ありません。

安堂 この点については、考えたこともありませんので、よく分かりません。

——自治体等が主催する賞ということで、作品の内容で注意した点がありますか？

柄澤 特にありません。ただ、前述のとおり太宰治賞は最終選考作とその選評がムック本として出版されますので、投稿前に通読しました。これは「傾向と対策」というより、応募者の礼儀だと考えています。

安堂 題材に、主催された北区の事柄を選ぶ、ということに気を配っていました。主催には費用がかかります。その土地の方々の税金を割いてチャンスを与えてくださっているのです、最低限、そのご好意にこたえるべきだと思っていました。

——今、小説を書いていますか。今後はどんな賞に応募したいと思いますか？

柄澤 細々ながら書いてます。太宰治賞は新人賞でもあるので、当面は応募よりも持ち込みになるかと思えます。受賞をゴールとしないで、書き続けることが主催者への恩返しだと愚考しております。

安堂 もちろん、挑戦しています。どの賞にするかは、書く内容によると思います。今回、自治体の文学賞とはいえ賞金をいただき、雑誌にも掲載していただいたわけですから、これからは無名の新人とは言えなくなると思えますので、応募資格が不問の賞の中で、自作の内容に合う賞を受賞できるよう努力しています。

——ありがとうございます。ますますのご活躍を期待しています。

「小説の神様は私に修業時代を与えてくださっていたんだ」と思ってしまう苦節〇年型。

④ 文学賞獲り直し型

一度デビューし、のちに文学賞を再度獲り直すパターン。1987年に『我が隣人の犯罪』でオール讀物推理小説新人賞受賞後、1989年に『魔術はささやく』で日本推理サスペンス大賞を受賞した宮部みゆきや、1990年に北日本文学賞を受賞後、1994年に『メルトダウン』で小説現代推理新人賞受賞。さらに1999年に『イントルーダー』でサントリミステリー大賞を受賞した高嶋哲夫などがこのタイプ。③と似ているが、担当編集者の下ですと修業することをやめたケースと言えればいいか。

⑤ 一発屋型

彗星のごとく現れ、彗星のごとく去っていくパターン。デビュー作があまりに話題になってしまい、それを超えるものを書くとして書けなくなるケースが多い。またはテレビに出たり講演をしたり、つまり書くこと以外の仕事に染まってしまうパターンも。しかし、仕事があるならまだいい。今後、③や④になる可能性もあり、どの作家がそうだと口が裂けても言えない。

⑥ 受賞後沈黙型

ささやかな賞を受賞して満足してしまっただか、伸び悩んだか、いつまで経ってもさっぱり芽が出ないパターン。しかし、これも③や④としてブレイクする可能性はある。いや、そうなってほしい。

やまなし文学賞

高い人気を誇る「一葉」ゆかりの賞

今年度の募集で記念すべき20回目を迎える「やまなし文学賞」は、平成4年4月、両親の出身地として山梨県にゆかりの深い樋口一葉の生誕120年を記念して制定された。近年は小説部門の応募数が毎回300編を超え、地方自治体がバックアップする文学賞の中では高い人気を誇っている。

「昨年度の募集では、全国40都道府県の方々からご応募をいただきました。県内の方からのご応募は全体の1割程度です。ご応募いただいた方々を見ると、近年、60歳代の方々と若い年齢層のご応募が増えているのが目につきますね。全体を見れば、下は15歳から上は94歳まで、幅広い年齢層の方からご応募いただきました」（山梨県立文学館 文学学芸課 渡辺寿子さん）

大きな特徴として挙げられるのは、研究・評論部門（図書として刊行、または雑誌、同人誌などに発表されたものを推薦）が併設されていること。広い視野で、文学の研究と新しい才能の発掘に力を入

れていることがうかがえるのが、高い人気の秘密なのかもしれない。

やまなし文学賞1編と佳作2編は山梨日日新聞紙上、および同紙ウェブサイトに掲載される。同紙は地方紙としては全国屈指の歴史を持ち、山梨県内では驚くほど愛読者の多い新聞なので、高齢の応募者の中にはここでの発表にステイタスを感じる人も多いようだ。

さらに、最高賞の受賞者は山梨日日新聞社から単行本としての出版が約束されている。単行本デビューへと直結する自治体文学賞は限られているので、これもまた大きな魅力だ。

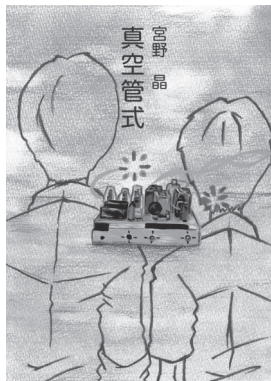
ジャンルは特に限定されていない。設立の目的には「山梨文学の振興」という文言もあるが、「山梨県を舞台に」などの縛りも特に設けられていない。

「選考委員が純文学の方なので、応募が最も多いのは純文学ですが、若い応募者の増加とともに、応募作のジャンルも年々広がってきているのはすごく感じます。歴史を振り返ると最高賞の受賞者は

主催 やまなし文学賞実行委員会

40〜50代の方が多かったようですが、今後は若い方にもチャンスが広がりそうな気がします。とはいえ、若い方だけでなく、まだまだ負けじと熟年齢の方々にも頑張ってもらいたい。とにかく、幅広い年齢層の方にチャレンジしてもらいたいです。選考委員の先生方も、新しい文学の息吹に期待されています。明治の文学界に旋風を巻き起こした一葉のような、新たな才能に出会えることを、本当に心待ちにしています」

期待されているのはあなたの中にある「まだ見ぬ何か」かも。探してみてください？



第19回受賞作「真空管式」宮野晶
(900円/税込み/山梨日日新聞社)



第19回募集チラシ

文学賞データ (小説部門)

- 規定枚数 400字詰換算80~120枚。
 - 応募資格 不問
 - 賞 やまなし文学賞1編=100万円
やまなし文学賞佳作2編=30万円
 - 締切 11月30日（消印有効）
 - 選考査員 坂上弘 津島佑子 佐伯一麦
- <http://www.bungakukan.pref.yamanashi.jp/>

応募数 (小説部門)

第12回	272編
第13回	213編
第14回	343編
第15回	269編
第16回	323編
第17回	296編
第18回	342編
第19回	338編

選考方法

- 第1次 1次選考担当スタッフ（文学館学芸員、教育者ほか）による選考。全応募作品を50編程度に絞り込む。
- 第2次選考 1次選考担当スタッフ（記者、評論家、教育者ほか）全員で作品を読み、最終候補作品3~4編を決定する。
- 最終選考 選考委員3名により各賞を選出する。

※第20回募集中。詳細はP.48参照。

島田荘司選ばらのまち福山ミステリー文学新人賞

主催 福山市／島田荘司選ばらのまち福山ミステリー文学新人賞実行委員会

カリスマ作家が一人で選ぶ「長編本格推理」

江戸時代には当今第一と評された漢詩人菅茶山、近代に入っては、巨匠井伏鱒二をはじめとして、随筆家福原麟太郎、劇作家小山祐士、詩人木下夕爾、小説家日野啓三を生んだ文学都市・福山。

この街に生まれた「ばらのまち福山ミステリー文学新人賞」は、「福ミス」の愛称で親しまれ、本格ミステリー作家への登竜門になっている。

求められているのは「広義のミステリーではなく、長編本格推理」。つまり、密室殺人など謎解きを主題とした作品。しかも、選者はたった一人。同市出身の、その道のカリスマ作家・島田荘司氏だ。「設立の目的は、多くの文芸家を生み出した福山という土地の地域文化を、この時代でも花開かせたいということです。そして、この街出身の島田先生と協議の結果、『地方の賞としてははじめて、まったくの新作長編小説を一般から募り、この中から年に一度、最高の出来の新作ミステリー小説を選んで授賞とし、即刻東京の大手出版社から出版しよう』とい

うことになったわけです」（福山市教育委員会社会教育部文化課村上寿広さん）応募枚数は350～800枚。アマチュアにとつては過酷な枚数ではあるが、その分、受賞した際の見返りは大きい。受賞作は講談社・光文社・原書房という大手出版社が年代わりで出版を担当。惜しくも最高賞の受賞を逃しても、それら出版社から出版のチャンスがある（次点の「優秀作」の出版例多数。最終選考手前で落ちても、出版社からの声がかかりがあった応募者も過去にはいたようだ。

「最も応募が多いのは、長年本格ミステリーを読まれている40～50代の方。です。第3回（昨年度）では60代の方が増え、第4回（今年度）では20～30代の方が増えています。島田先生や出版社の方が必ずおっしゃるのが、『とにかく2作目、3作目を期待できる人を』ということ。私どもも作家としての意気地をしっかりと持ちの方を期待しています」

第1回（2008年）の優秀作受賞作「少女たちの羅針盤」（原書房）は、福山

市を舞台に映画化もされ、作者の水生大海氏も次々と新作の本格ミステリーを発表している。

「もちろん、2作目、3作目と書くことはラクなことではない。それでも出身の作家さんたちは、福ミスの名を背負って、みなさん新作に取り組んでいらつしやいます。彼らに続いて、『文学のまち・福山』を広めてくださる新しい才能をお待ちしています」

長編本格推理という壁は高く見える。でも挑んでみる価値は確実にある。



たった一人の選者・島田荘司氏



第5回募集ポスター

文学賞データ

- 規定枚数 400字詰原稿用紙350枚～800枚程度。
- 賞 受賞作＝協力出版社によって即時出版されるものとし、その印税全額福山特産品
- 締切 2012年5月10日（消印）
- 選考委員 島田荘司

応募数

第1回	93編
第2回	58編
第3回	59編
第4回	65編

選考方法

- 第1次 ネット公募で選ばれた第1次選考担当スタッフによる選考。全応募作品を16編程度に絞り込む。
- 第2次 3つの出版社編集部員による選考。全員で作品を読み、最終候補作品3～4編を決定する。
- 最終選考 島田荘司氏による選考。最終候補作品を読み返し、各賞を選出。

※第5回募集中。詳細はP.55参照。

ちよだ文学賞

主催 千代田区

誰でも応募でき、賞金は200万円！

千代田区には神田神保町の書店街や美術館、博物館があり、島崎藤村、森鷗外、与謝野晶子、泉鏡花、武者小路実篤、吉行淳之介など、数多くの作家が暮らしたところとしても知られている。また、言うまでもなく政治、経済、文化の中心でもある。

ちよだ文学賞は、このような区の文化的、歴史的魅力をアピールし、文学の担い手となる新たな才能を発掘するために実施されている。

第1回募集は2006年(平成18年)で、この年、「千代田区文化芸術プラン」に基づく新規・主要事業として、多くの人が活字にふれ、文字・活字の大切さを知るきっかけにと創設された。

選考委員は、推理小説の逢坂剛氏、女流作家で恋愛小説の書き手として知られる唯川恵氏、芥川賞作家で純文学の堀江敏幸氏とバラエティーに富んでいる。

「ジャンルを特定せず、誰でも応募できる賞」(千代田区文化スポーツ課)というのがうなずける顔ぶれである。

規定枚数が120枚というのも、より多くの人が応募できるようにと設定された枚数だ。30枚、50枚というのは、実はアマチュアには難しい半端な枚数と言える。かといって、300枚もの長編となるとそれはそれでハードルが高く、下手をすると枚数を稼ぐためにセリフばかりを並べたライトノベルっぽい作品が増えってしまう。こうしたことを考慮したうえでの枚数だそうだ。

応募要項には「千代田区ゆかりの人物や区内の名所・旧跡、歴史などを題材にした作品を歓迎します」とあり、皇居のマラソンランナーを主人公にしたり、お茶ノ水の聖橋を舞台にした作品もあったという。

また、神田、麹町、番町といった時代劇ではおなじみの舞台を背景に、時代小説で応募する人もいる。

もちろん、第5回大賞の『夏の宴』のように千代田区が出てこない作品もある。千代田区を題材にするのは「歓迎」であって応募条件ではないから、「必然性」

ないけど、とりあえず千代田区の地名だけ出しました」みたいな書き方はしないほうがよい。

最終選考に残った作品は入選作品集『ちよだ文学賞』に掲載される。商業ベースではないが、千代田区の有料頒布物として1000冊前後印刷されるので、目に留める関係者もいるだろう。

第3回大賞受賞作の『森崎書店の日々』(八木沢里志)は、神田古書店を舞台に、主人公貴子の失恋と回復と成長を描いた小説だが、入賞作品集を読んだ映画監督の日向朝子氏は、「こういう映画があったら素敵だ。この小説を映画にしてみたい」と直感的に思い、映画化した。また、映画化が決まったあと、小学館文庫から出版化されている。

賞金は自治体文学賞では破格の200万円。いろいろな意味でおいしい賞である。



第5回の最終選考に残った作品を収録した入選作品集『ちよだ文学賞』

文学賞データ (前回例)

- 規定枚数 400字詰換算120枚以内。
- 応募資格 不問
- 賞 大賞1編=200万円 ほかに優秀賞、特別賞が選ばれることがある
- 締切 4月30日(消印有効)
- 選考査員 逢坂剛 唯川恵 堀江敏幸
- 共催 読売新聞社
- 後援 小学館

※第7回募集の詳細は本誌12月号に掲載予定。

応募数推移

第1回	372編
第2回	151編
第3回	242編
第4回	298編
第5回	279編
第6回	393編

選考方法

- 予選 第1次・第2次
- 最終選考 選考委員による最終選考 以上の3段階
- 授賞式 毎年秋に実施の「神保町ブックフェスティバル」に合わせて行っている

太宰治賞

自治体と出版社が共催する権威ある賞

太宰治賞は1965年(昭和40年)に創設。吉村昭、金井美恵子、宮尾登美子、宮本輝といった錚々たる作家を輩出した文学賞である。

しかし、昭和53年、筑摩書房は会社更生法の適用を受け、太宰治賞は第14回をもって中断、以来、20年以上も中断したままだったが、ゆかりの文人たちの文化の薫りを継承したいと考えていた三鷹市が、昭和14年〜23年まで三鷹市に暮らしていた作家、太宰治の没後50年を機に筑摩書房に呼びかけ、共催のかたちで復活した。

求められる作品は純文学作品と云っていい。しかし、復活第1回(第15回)の受賞作品はSF風の異色作だった。また、太宰治の名を冠した賞ということから、わざわざ舞台を東北にしたりといった作品もあったそうだが、第21回のように転機を迎える。

それがのちの芥川賞作家でもある津村記久子の『マンイーター』(受賞時の名義は津村記久生、単行本化の際に『君は

永遠にそいつらより若い』に改題)。

「津村さんは、若くて社会の中で底辺にいる人たちを描く作家と認知されています。そういうことを書いていいんだという雰囲気書き手の中に出てきたように感じました」(筑摩書房太宰治賞事務局 宮地香奈さん)

規定枚数は50枚〜300枚と幅があるが、50枚の短編はほとんどなく、120、130枚〜250枚ぐらいの作品が多いそうだ。

最終選考に残った4編は選評とともに『太宰治賞2012』に掲載され、受賞作は単行本化される。

また、受賞しなかった作品が単行本化されることもある。

たとえば、第16回受賞者の辻内智貴氏はその前年に「セイジ」で応募し、候補作とはなったものの同作では受賞していないが、単行本化はされている。出版社も主催に入っている賞のひとつの特徴だろう。

自治体文学賞の場合、受賞後、主催者

主催 三鷹市／筑摩書房

が新人を育成するという機能はないのが普通だが、太宰治賞の場合は違う。

「会社更生法の適用を受けたあとは、それまでに輩出した作家との関係も途切れしてしまい、多くの文芸編集者が辞めてしまいました。現在では文芸に強い編集者も充実し、文芸出版社として認知されるようになりましたので、作家を育成する体制も整っています」

前々回の第27回受賞者の今村夏子氏の受賞作は三島由紀夫賞をW受賞した。まさにプロの登龍門と言える賞である。



受賞作を含む最終候補作を掲載した『太宰治賞 2011』



第26回太宰治賞『こちらあみ子』(受賞時のタイトルは『あたらしい娘』)は第24回三島由紀夫賞をW受賞

文学賞データ

- 規定枚数 400字詰換算50〜300枚
- 応募資格 不問
- 賞 受賞作1編=100万円
- 締切 12月10日(消印有効)
- 選考査員 加藤典洋 荒川洋治 小川洋子 三浦しをん

応募数推移

第15回	1623編	第22回	1027編
第16回	545編	第23回	774編
第17回	934編	第24回	1090編
第18回	809編	第25回	1249編
第19回	863編	第26回	1412編
第20回	963編	第27回	1271編
第21回	927編		

選考方法

- 第1次 筑摩書房編集者などにより約100編を決定。
- 第2次 さらに絞り込んで15編に。
- 第3次 さらに4編を選ぶ。
- 最終選考 選考委員4名によって受賞作を決定(受賞作のほか、優秀作が選ばれることもある)。

※第28回募集中。詳細はP.50参照。

伊豆文学賞

主催 静岡県／静岡県教育委員会／伊豆文学フェスティバル実行委員会

題材が「伊豆」から「静岡県」に拡大

伊豆は、川端康成の「伊豆の踊子」など様々な小説の舞台となってきた。伊豆文学賞では、伊豆・東部地域をはじめとする静岡県の様々な魅力を全国に発信するため、静岡県内の自然や地名、行事、人物、歴史などを題材とした新たな文章作品を募集している。

「立ち上げから12回は、伊豆地方のみを題材にしていたのですが、一昨年、静岡県で国民文化祭が開催されたことをきっかけに、全県をもっと知っていただく」と題材を『静岡県』に広げました」（静岡県文化・観光部 伊豆文学フェスティバル事務局 所康俊さん）

最大の特徴は、やはり題材が静岡県内に限定されていること。それゆえか、全体の半数は県内からの応募者だという。「県外からの応募も年々増えてきています。作品の傾向としては、近年のプールの影響か、歴史小説が増えている気がしますね。県の歴史に光を当てていた、地元の間には大変読みやすい作品も多い。もちろんそれは喜ばしいこと

なのですが、できれば静岡の今を描いた作品も読んでみたいところです。選考委員の選評にもありますが、現代の静岡を舞台にして、土地の産業や食文化などに目を向けた新しい作品が欲しいですね」

毎年、入選作を揃えたアンソロジーが出版され、おもに静岡県内の書店で発売される。

「最近では、県外の書店からの引き合いもあるようです。文学をきっかけに静岡に触れていただくのがこの賞の目的ですから、県外の多くの方の目にとまるのはうれしいことです」

小説のほかに「随筆」「紀行」のに部門も併設しており、3部門の中から最優秀賞1編が選ばれる。

「静岡の地名だけを羅列したり、すべてが部屋の中で解決してしまったり……ほかの場所でも成立する内容のものとは真っ先に弾かれてしまいますね。随筆や紀行ではさすがにそういった作品はないのですが、小説ではそんな小手先の技ができてしまいますから。作品が本当に面白く



毎年、アンソロジーが刊行される



第15回募集ポスター

て、圧倒的な力量を持った人材ならそういった技を使っても残っていくのだと思いますが、今のところそういった人はお目見えしていないようです」

伊豆には数多くの文人が訪れたが、伊豆を含む美しい景観を持つ静岡という県に実際に触れてみれば、伝えたい魅力が見えてくるかもしれない。

文学賞データ (前回例)

- 応募規定 小説＝400字詰原稿用紙30枚程度～100枚／随筆＝同20枚程度～40枚／紀行文＝同20枚程度～40枚
- 賞 最優秀賞 1編＝100万円
優秀賞 1編＝20万円 ほか
- 締切 10月3日 (消印有効)
- 審査員 三木卓 村松友視 嵐山光三郎 太田治子

応募数推移

(小説のみ)

第10回	183編
第11回	173編
第12回	218編
第13回	177編
第14回	172編

選考方法

- 第1次 1次選考担当スタッフ（地元識者）により40編程度に絞り込む。
- 第2次 2次選考担当スタッフ（記者、評論家、教育者ほか）による選考。全員で作品を読み、最終候補作品3～4編を決定する。
- 最終選考 選考委員4名全員で全候補作品を読み返し、各賞を選出。

湯河原文学賞

主催 湯河原文学賞実行委員会／湯河原町

誰もが楽しめるエンターテインメントを！

国木田独歩、夏目漱石、島崎藤村、芥川龍之介、山本有三、谷崎潤一郎。数々の文豪に愛された湯河原町が、2001年に文化の香り高い町を目指して企画したのが「湯河原文学賞」だ。

この賞を語るうえでなくてはならないトラベルミステリーの巨匠・西村京太郎氏も湯河原を愛してやまない一人。

「西村京太郎氏には、この賞の選考にご協力をいただいています。もちろん、応募者のみなさんの中には、西村先生のファンの方も数多くいらっしゃって、先生のゆかりの賞ということで応募いただいたケースが多いですね。現代を舞台にした小説であれば内容は問いませんから、トラベルミステリー、サスペンス、ホラー、恋愛など、応募のジャンルは本当に幅広いです」（湯河原町総務部地域政策課 青木知子さん）

最優秀賞受賞作は月刊の小説誌「小説NON」（祥伝社）に掲載される。

短編の募集なので、受賞作1作で単行本化されることはないが、受賞作品集が

出版された例はある。第1回〜第4回の最優秀賞作品と第5回の特別賞作品を収録した「湯河原文学賞アンソロジー」がそうで、これらの作品は西村京太郎作品とともに祥伝社から出版された。トラベルミステリーの巨匠とのコラボレーション。これは西村京太郎ファンには応募の大きな動機となる。

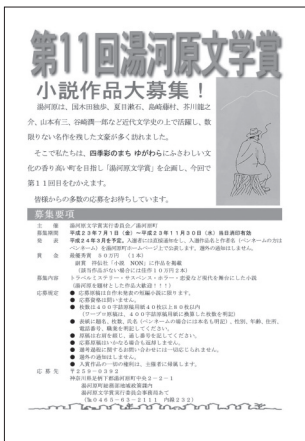
「現在でも、アトリエや別荘をお持ちの作家の方がたくさんいらして、やっぱり湯河原という街は文学とは縁の深いところなんです。そのことは本好きならご存知の方が多いようで、この町の文学賞だからということでも応募してくださる方もいます。地元の方よりはやはり町外の方の応募の方が圧倒的に多いですね。応募者の年齢層は本当に幅広い。作品を拝見させていただくと、大学生からご高齢の方まで、『読むのと書くのが好き』な方が楽しみながら作品を作

ってらっしゃるのがわかります」

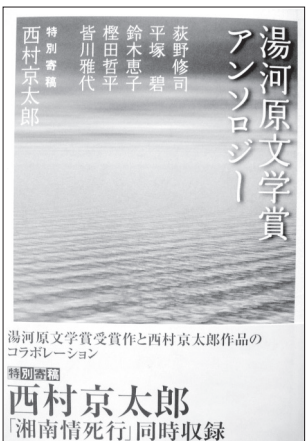
選考に関しては、祥伝社を中心と

した出版関係者と西村氏の協力のもと、湯河原町長が最終的に選考をする。最も求められているのは、幅広い年齢層に楽しんでもらえるエンターテインメント性に富んだ作品のようだ。

「豊かな自然と、ほっこりできる温泉と、温かい人たち……この町の良さをもっと多くの方に知ってもらえるためのツールの一つとしてこの文学賞があります。ぜひとも一度訪れてみてほしいですね」



湯河原文学賞募集チラシ



湯河原文学賞受賞作と西村京太郎作品のコラボレーション

特別寄贈
西村京太郎
『湘南情死行』同時収録

文学賞データ

- 規定枚数 400字詰原稿用紙40枚～80枚
- 締切 11月30日（消印消印）
- 賞金 最優秀賞＝50万円
該当作品がない場合は、佳作＝10万円

※第11回募集中。詳細はP.48参照。

応募数推移

(小説のみ)

第6回	114編
第7回	123編
第8回	129編
第9回	193編
第10回	167編

選考方法

祥伝社（出版社）関係者と西村京太郎氏の協力のもと、湯河原町長が選考する。

岡山県内田百間文学賞

主催 岡山県／岡山県郷土文化財団

岡山県の良いところをPRできる作品を

内田百間は、1989年に生誕100

年を迎えた。沸々とわき上がる恐怖感とどこかユーモラスな世界観に、今も熱烈なファンを持つこの大文筆家が、死の床まで思い続けたのは故郷・岡山。

1990年、生誕100年の翌年に誕生した「内田百間文学賞」（創設当時は「岡山・吉備の国文学賞」）は、百間の故郷・岡山の良さを全国の人々に知ってもらうことを目的とした文学賞だ。

募集するのは、百間が最も得意とした随筆および短編小説（評伝・紀行文・戯曲を含む）。岡山が舞台となる作品や、岡山県出身の人物・自然・文化・風土・物産などを題材とした作品でなければならない。

募集は二年に一度。百間のファンならずとも挑戦してみたい公募である。

「応募者の中で最も多いのは、若き日にほぼリアルタイムで百間を読まれていた60代の方々です。でも、16歳の高校生の応募もありましたから、つくづく世代や時代を超えて愛される作家なのだと思

いますね」

こう語るのは、主催の岡山県郷土文化財団事務局・三村典子さん。

「応募作品を読ませていただくと、百間の作品にあった幻想的でどこかユーモラスなイメージがそこはかとなく漂っているものが多いんです。最終審査に残るような作品は、本当に質のいい作品が多くて、審査に関わった人間はみんな驚いていますね」

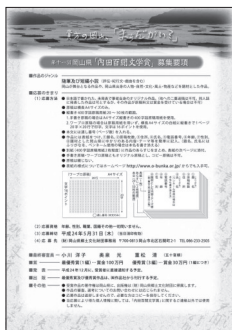
最優秀作と優秀賞作は出版が約束されているのもこの賞の大きな魅力だ。とはいえ、そこに至るハードルは決して低くはない。

「岡山県のPRを目的の一つとしてスタートした事情がありますから、岡山の良いところをより広く喧伝できる作品を求めています。1次、2次の審査も地元の人間が多数入っていますから、土地名だけ無理やり入れたような浅はかなものはすぐにはねられてしまいますね。それから、百間のテイストに近づきたくて、時代を明治や昭和にするのはよいけれど、

厳然としてある史実に反するものは残りはぶらいいと思います」

百間にとっては生涯の大切な思い出であった岡山という土地。

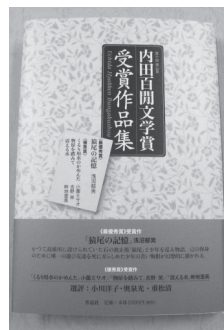
「百間と同じように岡山に愛着を持ってほしいとまでは言いませんが、少しでもこの土地を知って、好きになっていただけたら、書くものにもきつとそれが表れると思います」



第11回募集チラシ



第10回受賞作品集（作品社）



文学賞データ

- 規定枚数 A4判400字詰原稿用紙20～50枚。
- 賞 最優秀賞1編＝100万円
優秀賞3編＝30万円
- 締切 2012年5月31日（消印有効）
- 審査員 小川洋子 奥泉光 重松清

※第11回募集中。詳細はP.46参照。

応募数推移

第6回	208編
第7回	158編
第8回	176編
第9回	147編
第10回	331編

選考方法

- 第1次 第1次選考担当スタッフ（マスコミ関係者ほか）により全応募作品を40～50編程度に絞り込む。
- 第2次 第2次選考担当スタッフ（記者、評論家、教育者ほか）により最終候補作品10～15編を決定する。
- 最終選考 審査員3名が全員で全候補作品を読み返し、各賞を選出。

北区内田康夫ミステリー文学賞

主催 東京都北区／共催 財団法人北区文化振興財団

プロも輩出、自治体初ミステリー文学賞

北区の田端は、明治時代から若い芸術家が集う町として知られていた。そこに、大正3年に芥川龍之介、5年には室生犀星が住み始め、萩原朔太郎、堀辰雄、菊池寛、中野重治らも移り住んだ。

「北区は大正から昭和にかけて、田端地区に文士たちが移り住み、文士村が誕生しました。この地域で文化人の交流が盛んに行われ、その中で数々の名作が生まれました。北区内田康夫ミステリー文学賞はこうした歴史と土壌を背景に、小説を創作する機会を設け、優秀な作品に賞を授与することで、北区の知名度を高めるとともに、文化的イメージを強めることを目的に創設しました」（北区政策経営部広報課 尾形美保さん）

この文学賞が創設されたのは2002年（平成14年）で、今年で第10回を迎えた。ミステリー作家の内田康夫氏が平成8年から北区アンバサダー（大使）を務めていたことから同氏に協力を求めて創設したものであり、ミステリーに限定した文学賞としては自治体初の試みであった。

た。

内田康夫氏は北区西ヶ原出身で、「浅見光彦シリーズ」をお読みの方はご存じのとおり、主人公・浅見光彦は西ヶ原出身という設定。同シリーズには北区がたびたび登場する。

この文学賞のユニークな点は、大賞受賞作品が翌年に舞台化され、上演されることである。また、大賞、および特別賞受賞作品は、月刊誌「ジェイ・ノベル」（実業之日本社）に掲載される。

今年発表になった第9回は、大賞に「神隠し異聞『王子路考』」（安堂虎夫）が選ばれた。内田康夫氏は選評で「大賞作品はよく練り上げられていました。文章も物語の展開もまずまず。現在の北区内田康夫氏はどうだったかを丹念に取材して、みごとに再現しています。読売（仮版）作者を主人公にした人物配置も申し分ありません。大賞に値する佳作だと思えます」と述べている。

過去9年の受賞者を見ると、北区内田康夫ミステリー文学賞を受賞後、第1回

ダイヤモンド経済小説大賞優秀賞も受賞し、その後、『ガイシの女』（講談社）、『リストラに乾杯!』（廣済堂）などを出版している汐見薫や、「みをつくし料理帖シリーズ」（ハルキ文庫）でベストセラー作家になっている高田郁がいる。

募集要項には「北区の地名・人物・歴史などを入れ込んだ作品を歓迎します」とあるが、このことの有無が選考の基準とはならない。

今回の第11回募集は、第10回の授賞式が済み次第、来年3月から始まる。



前回（第9回）の大賞受賞作品が掲載された「ジェイ・ノベル」



第1回～第5回の大賞作品、および内田康夫『鏡の女』を収録した『はじめての小説』

選考方法

- 第1次 選考委員によって1次通過作品を決定。
- 第2次 選考委員によって2次通過作品を決定。
- 最終選考 内田康夫氏、北区長、北区文化振興財団理事長、ミステリー関連出版社の編集者ほかによって大賞、特別賞作品が決定。

応募数推移

第1回	187編
第2回	150編
第3回	210編
第4回	146編
第5回	137編
第6回	189編
第7回	262編
第8回	268編
第9回	283編

文学賞データ（前回例）

- 規定枚数 400字詰換算40～80枚
- 応募資格 不問
- 賞 大賞1編＝100万円
特別賞1～2編＝10万円
- 締切 9月30日（必着）
- 選考査員 内田康夫 ほか
- 協力 内田康夫 浅見光彦倶楽部
- 協賛 実業之日本社

木山捷平短編小説賞

主催 笠岡市／笠岡市教育委員会／笠岡市文化・スポーツ振興財団

短編の名手、木山捷平を顕彰した文学賞

木山捷平は、身のまわりにあること、自分が体験してきたことに材をとり、洒落な表現で好評を博した私小説作家。庶民生活の機微をうがち、人生の哀歓をユーマアとペーソスをまじえて写し出した氏の文学は今も根強い愛読者をもつ。

氏の出身地である笠岡市では、短編小説を得意とした木山の業績を顕彰し、新たな時代の短編小説の担い手を育てようと「木山捷平短編小説賞」を創設。「応募がもつとも多い年齢層は60代以降の方。意外なのは、気さくで大らかだった木山の気質がそのまま反映されたような作品が女性の応募作品に多いこと。自分が体験したこと、感じたことをストーリーに表現していて、読んでいて清々しい」(笠岡市教育委員会生涯学習課文化グループ統括 岡田晴雄さん)

誰でも自分についての小説なら一編は書けると言われる。そんな小説を、私小説の名手が冠されたこの賞にぶつけてみてはいかがだろう。

「こんな時代だから、もつともつと多く

の方に、小粋に強く生きた木山という文筆家とその作品を知ってもらい、幅広い世代の方に応募してもらいたい。この賞の表彰状は、笠岡市の名産である石に刻んでお渡します。木山とともに市のことも広く知っていただけたらうれしいですね」

応募数推移

第1回	239編
第2回	227編
第3回	243編
第4回	256編
第5回	326編
第6回	280編

文学賞データ (前回例)

- 規定枚数 400字詰原稿用紙50枚以内。
- 賞 受賞作=50万円
- 締切 9月24日(消印)
- 審査員 川村湊 佐伯一麦

長塚節文学賞

主催 常総市／節のふるさと文化づくり協議会

「節のふるさと文化創造事業」として実施

長塚節は明治生まれの歌人、作家。19歳のときに正岡子規の写実主義に共感、入門。歌人としては子規の正当な後継者と言われていた。また、朝日新聞に連載した『土』をはじめ、農民小説の先駆けとしても知られる。

常総市では、この長塚節を顕彰するため、茨城県の一村一文化創造事業制度を導入した「節のふるさと文化創造事業」の一環として、長塚節文学賞を創設、来年初回の回で第15回を迎える。

「長塚節文学賞には、短編小説のほか、短歌および俳句の部門がありますが、3つの部門の応募数をすべて合計すると、1万6千もの作品が集まります。短編小説部門は、初めて小説に挑戦する高校生から、定年を迎えた熟年の方まで応募者は多士済々。短編小説の受賞作は、読んでくださった方々の多くに「達者でびっくりした」と素直に褒めていただける作品が多いんです」(長塚節文学賞事務局常総市教育委員会生涯学習課主査 松崎幸子さん)

長塚節は、長編小説『土』の中で明治中期の農村の姿をリアルに表現した。といつても、長塚節文学賞の応募作品は題材自由。過去の受賞作を読めばわかるとおり現代小説でもいい。なお、受賞作は他の部門の作品とともに「入選作品集」に掲載される。

応募数推移

第7回	126編
第8回	99編
第9回	110編
第10回	134編
第11回	68編
第12回	153編
第13代	126編
第14回	155編

文学賞データ (前回例)

- 規定枚数 400字詰原稿用紙21~50枚。
- 賞 大賞1編=20万円
優秀賞、佳作=記念品
- 締切 2月8日(消印有効)
- 審査員 高橋三千綱 堀江信男 成井恵子

坊ちゃん文学賞

主催 松山市坊っちゃん文学賞実行委員会

新しいタイプの青春小説を！

正岡子規や高浜虚子などを輩出し、夏目漱石の代表作『坊っちゃん』の舞台として全国に知られる松山市は、「文学のまち松山」を未来につなぐ新たな挑戦として、1989年の市制100周年を機に「坊っちゃん文学賞」を創設。新しいタイプの青春小説を発掘することを目的に公募を行っている。

せられており、時代を反映した内容も多くなっていますね」
大賞作品はマガジンハウス刊「クウネル」誌に掲載される。また、歴代の大賞作品の中には、単行本化、映画化されたものも数多い。

応募数推移

第1回 1386編	第2回 740編
第3回 1057編	第4回 1164編
第5回 1037編	第6回 910編
第7回 811編	第8回 1008編
第9回 1067編	第10回 1048編
第11回 1138編	第12回 1057編

「この賞の大きな特徴としては、青春小説という誰でも一度は経験するこのテーマに加え、規定枚数が比較的平易であるところ。そして、自治体が主催する文学賞の中でも高額な200万円を賞金としているところも魅力となっているものと思います」(松山市総合政策部国際文化振興課 田中雄平さん)

1年目を募集年、2年目を審査発表年とする2カ年事業としているので、構想から執筆、作品を仕上げるまで十分な時間を費やせる。

「青春小説をテーマに掲げているものの、近年では新しい家族のあり方や不安定なジェンダーの世界を描いた作品などが寄

文学賞データ (前回例)

- 規定枚数 400字詰原稿用紙換算80枚～100枚。
- 賞 大賞=200万円
佳作=50万円
- 締切 6月30日 (消印)
※次回締切は2013年。
- 審査員 椎名誠 (審査員長) 早坂暁 中沢新一 高橋源一郎

舟橋聖一顕彰青年文学賞

主催 彦根市／彦根市教育委員会

満18歳～満30歳の青年が対象

NHK大河ドラマの第1作は、昭和38年4月～同年12月まで放映された舟橋聖一原作の『花の生涯』だった。

舟橋聖一は、昭和42年、63歳で芸術院会員となり、71歳のときに文化功労者に選任、翌年の昭和51年1月に亡くなったが、それから十余年経った平成元年、青少年の教育・文化振興に役立ててほしいという舟橋家の意向のもと、舟橋聖一顕彰青年文学賞が創設された。目的は、次代を担う青少年の読書創作活動の振興だ。

「この賞の最大の特徴は、年齢制限(満18歳から満30歳まで)を設け、青年を対象としている点です。ここにはプロの作家への登竜門となつてほしいという願いが込められているんです」(舟橋聖一記念文庫事務局 彦根市立図書館館長 安居勉さん)

応募作に傾向はあるだろうか。
「近年の傾向としては、プロ志向の男性の応募が増えていることが挙げられますね。私たちの願いを理解して、プロを目指す若い方が本気の作品を応募してくれ

応募数推移

第15回 100編
第16回 92編
第17回 111編
第18回 68編
第19回 58編
第20回 68編
第21回 96編
第22回 66編
第23回 75編

文学賞データ (前回例)

- 規定枚数 400字詰原稿用紙50枚以内 (随筆は10枚以内でも可)
- 賞 文学賞=50万円
佳作=10万円
- 締切 9月7日 (消印)
※次回締切は2012年。例年6～9月に募集。
- 審査員 秋山駿 佐藤洋二郎
藤沢周 増田みず子

阿賀北ロマン賞

主催 敬和学園大学新発田学研究センター／新発田市／聖籠町

求む！ 阿賀北地域をアピールする熱意

阿賀北ロマン賞は、2008年（平成20年）、敬和学園大学新発田学研究センター（敬和学園大学の中の町おこしを目的とした組織）を主催とし、新発田市、聖籠町が共催となって創設された文学賞。小説・随筆部門のほか、創作童話・児童文学部門もある。

佳秀氏（同学長）、北嶋藤郷氏（同名誉教授）、神田より子氏（同教授）、星龍雄氏（新潟日報新発田支局長）により、第1次審査と最終審査の二回に分けて行う。大賞と優秀賞作品はHPで公表され、『年報新発田学』にも掲載される。

テーマは毎年変わり、第4回は「阿賀北地域の『食』または『食卓』」にまつわる作品を募集している。

同賞は、阿賀北地区から作家が出ていないことから、埋もれた人材を発掘するために創設。また、阿賀北という名称が使われなくなっていることから、阿賀北地域を県内外にアピールすることを目的に実施している。

阿賀北地域とは、阿賀野川の右岸（北部）に位置する阿賀野市、新発田市、胎内市、聖籠町を指し、新潟市北区、村上市、岩船郡を含むこともあるそうだ。

選考は、作家で「三田文学」編集長の加藤宗哉氏、絵本作家の菅野由貴子氏、新井明氏（敬和学園大学前学長）、鈴木

文学賞データ

- 規定枚数 2000字～2万字。
- 応募資格 高校生以上
- 賞 小説部門 一般・大学生の部 大賞1編＝30万円
高校生の部 大賞1編＝5万円
随筆部門 大賞1編＝10万円
- 締切 10月15日（消印有効）
- 選考査員 加藤宗哉 菅野由貴子 敬和学園大学学長、前学長、教授 ほか

応募数推移 （小説・随筆部門）

第1回	98編
第2回	47編
第3回	36編

中山義秀文学賞（白河市）

- 概要 中山義秀記念文学館の開館を記念して1993年（平成5年）に創設された賞。歴史小説、時代小説が対象。
- 賞 副賞＝50万円・コシヒカリ1俵
- 選考査員 竹田真砂子 津本陽 縄田一男 安部龍太郎
- 過去の受賞者 佐江衆一 火坂雅志 岩井三四二 植松三十里 ほか

伊藤整文学賞（小樽市）

- 概要 小樽市出身の作家、伊藤整を記念して1990年（平成2年）に創設された賞。小説と評論の2部門がある。
- 賞 副賞＝100万円
- 選考査員 黒井千次 菅野昭正 津島佑子 松山巖
- 過去の受賞者 小説・大江健三郎 川上弘美 高橋源一郎 島田雅彦 ほか 評論・秋山駿 佐木隆三 柄谷行人 ほか

泉鏡花文学賞（金沢市）

- 概要 泉鏡花生誕100周年を記念して1973年（昭和48年）に創設。ロマンの香り高い小説や戯曲の単行本対象。
- 賞 副賞＝100万円
- 選考査員 五木寛之 村松友視 村田喜代子 金井美恵子
- 過去の受賞者 半村良 森茉莉 眉村卓 吉本ばなな 柳美里 田辺聖子 野坂昭如 丸谷才一 小川洋子 嵐山光三郎 ほか

しませ 島清恋愛文学賞（白山市）

- 概要 石川県白山市出身の作家、島田清次郎にちなんで1994年（平成6年）に創設。恋愛小説が対象。
- 賞 副賞＝100万円
- 選考査員 渡辺淳一 藤田宜永 小池真理子
- 過去の受賞者 坂東真砂子 野沢尚 藤堂志津子 岩井志麻子 谷村志穂 井上荒野 石田衣良 村山由佳 ほか

紫式部文学賞（宇治市）

- 概要 京都市ゆかりの紫式部の名を冠し、1991年（平成3年）に創設。女流作家の文芸作品、文学研究が対象。
- 賞 副賞＝200万円
- 選考査員 梅原猛 川上弘美 竹田青嗣 村田喜代子 鈴木貞美
- 過去の受賞者 江國香織 吉本ばなな 川上弘美 大庭みな子 依万智 津島佑子 伊藤比呂美 川上未映子 桐野夏生 ほか

坪田譲治文学賞（岡山市）

- 概要 名誉市民の坪田譲治の業績をたたえ、1984年（昭和59年）に創設。大人も子どもも共有できる優れた作品に。
- 賞 副賞＝100万円
- 選考査員 五木寛之 川村湊 高井友一 竹西寛子 西本鶏介 森詠
- 過去の受賞者 太田治子 江國香織 角田光代 重松清 伊藤たかみ ほか

アマチュアは対象ではありませんが……
既刊対象 自治体文学賞